

# 『生きる喜び』における科学万能主義批判

—ゾラの文明観の一側面をめぐって—

林 田 愛

## 序

これまでのエミール・ゾラ研究を大きく分けると、社会的、歴史的なアプローチがある一方、文学的な側面からの作品研究も大幅に見直されている。その中でも記号論の観点からの分析とともに注目すべき研究<sup>1</sup>が成されているのが、ゾラの作品における象徴の問題である。自然主義作家としてのゾラにはもとより、当時の遺伝学を取り込んだ全20巻に及ぶ『ルーゴン・マッカール叢書』においてフランス第二帝政期の社会の現実を描き出すことに意図があった。が、同時に、彼の文体の象徴的な側面も大きな注目の的となってきた。そこで問題になるのが象徴としての「病」の役割である。19世紀後半のフランス文学作品における病をめぐる肉体と精神の問題についての体系的な研究<sup>2</sup>はここ数年の間にすでに成されており、ゾラの作品も大半が取り扱われているが、それはあくまでも作品内に取り込まれた医学的言説の問題と、象徴としての病をめぐる登場人物の幻覚や衝動の問題に限られており、そこから作家の死生観や科学観などの観念的な問題に広げて体系的に研究したものはこれまでほとんどなかった。実証主義をその作家としての出発点とし、後にクロード・ベルナールの決定論を信奉した科学主義的作家としてのゾラの一元的な位置づけは、果たして正しいのだろうか。

本論では『ルーゴン・マッカール叢書』中第12巻にあたる『生きる喜び』 *La Joie de vivre* を対象とした。この作品の選択の大きな理由のひとつとして、まず「病」の描かれ方があり、そしてなによりも、この作品の執筆過程が作家自身の実生活と大きく結びついていることである。本来、『生きる喜び』は、大衆の大人気を博した第9巻『ナナ』(1880)の直後に出版されるはずであった。しかし、同年の母親の死で、書きかけていた第1稿は中断され、1883年に大幅な修正を加えられることになる。その年の暮れから出版<sup>3</sup>されるが、1880年から1884年にかけてのゾラの人生は苦しみの連続だった。母親の死に始まり、フローベール、ツルゲーネフ、そしてマネと、親しい仲間の突然の死、そして文壇における孤立など、『生きる喜び』がそれら作家の内面的な苦しみを反映していると言われる所以である。さらに、この小説は『ルーゴン・マッカール叢書』中、最も哲学的、かつ曖昧な作品であり、作家の知的そして精神的な葛藤が色濃く表れている作品だ

とされている<sup>4</sup>。そこで、本論では、『実験小説論』（1880）出版とほぼ同じ時期に着想され、その四年後に改めて書かれた『生きる喜び』を取り上げ、この作品に見られながらも、これまで究明されることのなかったゾラの思想的変遷を解明する。

## I. 象徴としての病の役割

まず『生きる喜び』の主人公ポーリーヌ・クニユをルーゴン・マッカール家の系譜の中で位置づけてみる。ゾラの系統樹<sup>5</sup>によると、遺伝的な要素では比較的ルーゴン家よりも劣悪なマッカール家に1852年に生まれ、同い年のいところに『居酒屋』、『ナナ』のナナを、叔母に『居酒屋』のジェルヴェーズを、アルコール中毒で変死したアントワヌ・マッカール（『ルーゴン家の運命』、『ブラッサンの征服』、『パスカル博士』）を祖父に、そして曾祖母に一族の遺伝的悪の源であるアデライード・フーク（『ルーゴン家の運命』、『パスカル博士』）を持つにもかかわらず、「*Mélange équilibré. Ressemblance physique et morale du père et de la mère. État d'honnêteté.*」とされている。そこでゾラの提唱する4つの遺伝の一つである「隔世遺伝」<sup>6</sup>があげられる。心身ともに健康とされながらも、作品全体を通じて、ポーリーヌは激しい嫉妬心という病を与えられている<sup>7</sup>。わずか10歳で両親（母は『パリの胃袋』のりザ・マッカール）を相次いで亡くしたポーリーヌは、ノルマンディーの片田舎に住むシャントーという父方の親戚に引き取られることになるが、そこは「病」に蝕まれた家であり<sup>8</sup>、主人公は自分の病と戦うだけでなく、その家の人々の心身的な病を癒すという役割を担っている。主人のシャントーは重度の痛風に罹っているが、常に食欲との戦いに負け、最後には、生きながらにしてその身体は崩壊してしまう。シャントー夫人は田舎貴族の出身だが常に卑俗的な上昇志向にとらわれている典型的なブルジョワで、善良な性質であるにもかかわらず、生に対する不満から生じる過度の出世欲や欺瞞を内面に溜め込んだ結果、そのやり場のない感情が足の水腫として表出し、最後には心臓病の発作で悶死する。以下はその描写の一部である。

Ce fut l'époque de sa vie où Mme Chanteau acheva de perdre sa tranquillité. De tout temps, elle s'était dévorée elle-même; mais le sourd travail qui émiettait en elle les bons sentiments, semblait arrivé à la période extrême de destruction; et jamais elle n'avait paru si déséquilibrée, ravagée d'une telle fièvre nerveuse. La nécessité où elle était de se contraindre, exaspérait son mal davantage. Elle souffrait de l'argent, c'était comme une rage de l'argent, grandie peu à peu, emportant la raison et le cœur. Toujours elle retombait sur Pauline, elle l'accusait maintenant du départ de Louise, ainsi que d'un vol qui aurait dépouillé son fils. [...] Après quinze jours de ces continuels combats, son visage avait pris une pâleur de cire sans qu'elle eût maigri pourtant. Deux fois, l'enflure des pieds était revenue, puis s'en était allée.

Un matin, elle sonna Véronique et lui montra ses jambes, qui avaient enflé jusqu'aux cuisses, pendant la nuit<sup>9</sup>.

ゾラは夫人の心の深い闇を描きながら、理性を減らし精神を蝕んでいった欺瞞や憎しみの感情を足の水腫と言うかたちで身体に表出させた。この水腫と心臓病は作家の実体験と結びついているが<sup>10</sup>、ここではあきらかに寓話的な要素が濃いといえる。その臨終のときまでポーリーヌに対する理不尽な憎しみに執着した夫人の死には、作家の厳しい批判が見受けられる。常に卑俗的な感情に心を病み、生きることの充足感をもたらす幸福を知らないシャントー夫人は、19世紀フランスにおける中産階級の愚かさを具現していると言えるだろう。このような文明社会の孕む問題を、次に一家のひとり息子であるラザールを例にみしてみる。

小説冒頭では19歳のこの青年は、『生きる喜び』執筆当時<sup>11</sup>にフランスの知識階級の間で隆盛したショーペンハウエルの「未消化な」<sup>12</sup>厭世思想に毒されており、それに生来の神経症が拍車をかけて、小説の最後には30代であるにもかかわらず心身ともに老人のような姿に描かれている。ゾラは自分の患っている神経症をもとにこの登場人物の症状を描いているが<sup>13</sup>、自伝的な要素をこの登場人物に付与しながらも、同時に、当時の厭世思想家達のカリカチュアとしての皮肉を付与することも忘れていない。

Tout avortait. Son existence n'était qu'une mort lente, quotidienne, dont il écoutait comme autrefois le mouvement d'horloge, qui lui semblait aller en se ralentissant. Le cœur ne battait plus si vite, les autres organes devenaient également paresseux, bientôt tout s'arrêterait sans doute; et il suivait avec des frissons cette diminution de la vie, que l'âge fatalement amenait. C'étaient des pertes de lui-même, la destruction continue de son corps : ses cheveux tombaient, il lui manquait plusieurs dents, il sentait ses muscles se vider, comme s'ils retournaient à la terre<sup>14</sup>.

ラザールの神経症は精神内部を荒廃させ、遂には身体まで破滅させた。引用個所の前半はあくまでもラザールの知覚的なレヴェルにとどまっているが、後半2行の描写部分は、明らかにその肉体的荒廃を物語っている。「mort lente」と例えられる精神的な死が、内側から徐々に肉体を蝕む過程を上引用から見るができる。神経症という、本来は精神の病であるはずのものが身体に影響を与えているという事実に、「病」をめぐる心身の深い結びつきを認めることができる。そこには、デカルト以来ヨーロッパ思想の根源にある心身二元論とは意を異にするゾラ独自の「病」観が表れていると言えるが、それについては後に詳しく述べることにする。

このようにして、シャントー一家の登場人物二人を例に病をめぐる精神と肉体の相互関係を見てきたが、この問題を自然空間に広げて考察する。

## II. 病の表象としての自然の機能

ここではラザールとポーリーヌを例に、登場人物の心身と自然との関係を分析する。ふつう文学作品における自然というと登場人物の心理を反映するもの、もしくはその逆として扱われることが多いが、『生きる喜び』の自然はそこにとどまらず、病の反映という機能を担っている。まず初めに、ラザールと海の関係を見る。ほぼ同年に出版された『女の一生』(1883)と同じノルマンディー海岸を舞台背景とする『生きる喜び』は、「海」というモチーフから論じられることが多い。第一、この海は全作品を通じて常に介在し、それ故、実に様々な視点からの分析がある。主人公ポーリーヌの友人、または分身として、そして時には生の源としての女性の象徴として見られるが、そのなかでも特に顕著な例が、人間の生のリズムとこの海の律動との相互関係である。確かに、この小説全11章の中で演じられる人の生死や病の移り変わりは、その表情をよく変える海の律動と重なり合い、これはゾラ自身が故意に行ったものであろう<sup>15</sup>。ラザールの神経症には海の律動のように周期があり、その内面世界は曇天の海のごとく倦怠に倦むかと思えば、嵐の海のように荒れ狂う情熱に支配されることがある。作品を通じて彼は様々な試み——音楽、医学、事業、堤防——に挑戦し、すべては挫折に終わるが、このようにして、何か新しい情熱に駆られるたびに夢を追い、それに失敗すると深い倦怠に落ち込んでいる。しかしここではあえて、作家自身も無意識に行ったであろう病の表象としての自然の機能を追求したい。ここでいう「情熱」というのはすなわち「病」のことであり、ラザールはこの情熱と倦怠の間を絶えず行き来しており、情熱に突き動かされるままに行動しては、挫折して神経症の悪化を招いている。一度は海草の事業に手を出すが見事に失敗し、その腹いせに海を征服しようと堤防の建設に乗り出す。

L'espoir de vaincre la mer l'enfiévrerait. Il avait conservé contre elle une rancune, depuis qu'il l'accusait sourdement de sa ruine, dans l'affaire des algues. S'il n'osait l'injurier tout haut, il nourrissait l'idée de se venger un jour. Et quelle plus belle vengeance, que de l'arrêter dans sa destruction aveugle, de lui crier en maître : « Tu n'ira pas plus loin!<sup>16</sup> ! »

海の事業に失敗した挫折感から新たな情熱に駆られたラザールの、海に対する異常とも言うべき復讐心を上の引用から見るができる。先にも述べたとおり、命の源としての女性の傲慢さをもしくは生と死の永遠の繰り返しである人生の不条理に対抗するためにラザールは海との戦いに挑むという読み方が一般的<sup>17</sup>であるが、一方で、この怒りと征服の意志は、自己の神経症（倦怠ではなく激昂状態）を荒れ狂う海の嵐に投影してそこに向けられているとも見るができる<sup>18</sup>。それは、神経症と同時に、人間として理性で自然を征服しなければならないというラザールの征服欲に通じるが、外界の自然とは、彼自身の本質、すなわち神経症の遺伝という内的自然にもつながる。しかし、防波堤を築いて海の嵐を食い止めることも、自己の情熱をも抑制することのできなかったラザールは、二重の失敗を被ることとなる。すなわち、海の征服という現実面の挫折、

そして遺伝という内的自然の克服における象徴的な挫折であり、それはラザールの神経症をさらに悪化させることになる。

Que de fois il s'était traité de lâche ! que de fois il avait juré de lutter contre son mal ! Il se raisonnait, il arrivait à regarder la mort en face; puis, pour la braver, au lieu de veiller dans un fauteuil, il s'allongeait tout de suite sur son lit. La mort pouvait venir, il l'attendait comme une délivrance. Mais, aussitôt, les battements de son cœur emportaient ses serments, et le souffle froid glaçait sa chair, et il tendait les mains en poussant son cri : « Mon Dieu ! mon Dieu ! » C'étaient des rechutes affreuses, qui l'emplissaient de honte et de désespoir<sup>19</sup>.

ここで注目したいのは、まず「lutter」という表現であり、ここにラザールの、神経症を克服しようという意志を見ることができる。これは決してかなうことはなく、その後も様々な失敗を続け、物語の最後には倦怠に精神を侵され廃人同然になってしまう。ここでは書面の都合上、ラザールの神経症の諸症状<sup>20</sup>に言及することは避けるが、その症状のひとつであり上の引用にもみられる強迫的な死の恐怖について考えてみる。生の源として無限の存在である海は、有限の存在としてのラザールに脅威を与えるが、科学万能主義の立場からすれば、知性をもって自然を征服することこそ人間の優位性を証明するものであり、大自然のリズムにおとなしく従って生きるということは敗北を意味する。しかし、ラザールは海との戦いだけではなく、様々な試みに挫折して完全な自信喪失に陥り、精神的な病を悪化させ、遂には倦怠に心を蝕まれて廃人同然になってしまった。その点で、ポーリーヌが生物の神秘を信じて決して死を恐れることがなかったのとは、きわめて対照的である。自然という無限をまえに常に死の観念と自己の卑小感から逃れることのできなかったラザールと違い、ポーリーヌは、その無限とは人間を包摂する大いなるものであると同時に人間の理解を越えているという無意識の信仰によって救われていた。

そこで次に、ポーリーヌと自然との関係をみる。作品を通じて心身ともに健康で勇気のある女性として描かれているポーリーヌも、母方の先祖から受け継いだ「激しい嫉妬心の衝動」という遺伝的な病に常に苦しんでいる。昼間はその衝動を意志の力で抑えることができて、夜になって自分の部屋に帰るとつらい苦しみに襲われる。ここでも「lutter」<sup>21</sup>という表現が用いられ、先に見たラザールの例では「情熱」という病が海の嵐に投影されたが、ポーリーヌの病である「情熱」は、ろうそくの炎に投影される。

Elle s'assit, sans même ôter son chapeau, resta quelques minutes immobile, les yeux grands ouverts sur la bougie qui l'aveuglait. Brusquement, elle s'étonna, que faisait-elle à cette place, la tête pleine d'un tumulte, dont le bourdonnement l'empêchait de penser ? Il était une heure, elle serait mieux dans son lit [...] Sa robe était déjà pliée au dossier d'une chaise, elle n'avait plus qu'un jupon et sa chemise, lorsque son regard tomba sur sa

gorge de vierge. Peu à peu, une flamme empourpra ses joues. Du trouble de son cerveau, des images se précisaient et se dressaient, les deux autres dans leur chambre, là-bas, une chambre qu'elle connaissait, où elle-même, le matin, avait porté des fleurs. La mariée était couchée, lui entraît, s'approchait avec un rire tendre<sup>22</sup>.

上の引用部分は、ラザールとルイズの結婚式の夜に、心身ともに憔悴して一人部屋に帰ってきた直後のポーリーヌの様子である。ろうそくの光にはんやりと照らされただけの部屋で、ゆらめく炎を見つめる主人公の頬は火照り、「bourdonnement」や引用後半部分の幻覚に見られるように、その思考は乱れ諸感覚の混乱を呼ぶ。このようなろうそくの炎の機能を示す例は作品を通じて他に幾例もあることが認められ<sup>23</sup>、そこから、ろうそくの炎が登場人物の感覚の乱れを引き起こす機能があることがわかる。これはゾラが意識的に行ったと言うよりは、むしろ無意識に行ったと見るほうが妥当であろう<sup>24</sup>。ろうそくの炎を「見る」という行為と、感覚的な混乱が平行されている事実に、ろうそくの炎の幻想的な機能を読み取ることができる。バシュラールは、ろうそくの炎は夢想する人の精神状態を反映するとしている<sup>25</sup>が、『生きる喜び』におけるろうそくの炎はそこにとどまらず、登場人物の意識を混乱させながら、その無意識の衝動を引き出して、「情熱」という内面の炎を掻き立てる。

Alors, la jalousie la [Pauline] reprit aux entrailles, devant les tableaux que son excitation déroulait toujours. Elle voulait vivre, et vivre complètement, faire de la vie, elle qui aimait la vie ! A quoi bon être, si l'on ne donne pas son être ? Elle voyait les deux autres, une tentation de balafrer sa nudité lui faisait chercher ses ciseaux du regard. Pourquoi ne pas couper cette gorge, briser ces cuisses, achever d'ouvrir ce ventre et faire couler ce sang jusqu'à la dernière goutte ? [...]

Brusquement, elle s'abattit sur le lit, à plat ventre. Elle avait saisi l'oreiller dans ses bras convulsifs, elle le mordait pour étouffer ses sanglots ; et elle tâchait de tuer sa chair révoltée, en l'écrasant sur le matelas. [...] Enfin, vivement, elle passa une chemise de nuit, elle retourna s'enfouir sous les couvertures, qu'elle monta jusqu'à menton. Son corps grelottant se faisait tout petit. Quand la bougie fut éteinte, elle ne bougea plus, anéantie par la honte de cette crise<sup>26</sup>.

この引用部分は先の引用に続くものであるが、主人公の精神的混乱の加速を見ることが出来る。幻覚は明確な形をとって目の前に現れ、錯乱したポーリーヌの殺人衝動は己の身体へと向う。*Le Corps et la maladie dans les récits réalistes* の著者である J.-L. Cabanès は、この殺人衝動とポーリーヌのいところである『獣人』のジャック・ランチェの衝動との類似を述べている<sup>27</sup>が、同じいところである『制作』のクロード・ランチェの殺人衝動も自分へと向かい自殺という結末をたどった。しかし、これらのいところ達とは違って、ポーリーヌはその衝動と必死に戦う。そしてそのろうそく

の炎が « éteinte » 「消えた」時、彼女の発作も終わる。そこでさらに注目したいのが、これらの発作のたびにポーリーヌの精神に変化が起こることである。その一例をここで引用する。

La gaieté même de Pauline s'était faite tranquille, cette gaieté vaillante qu'elle avait gardée au milieu de ses tourments. Son rire sonore n'emplissait plus l'escalier et les pièces; mais elle demeurait l'activité et la bonté de la maison, elle y apportait chaque matin un nouveau courage à vivre<sup>28</sup>.

嫉妬の発作の翌日、もしくはその数日後のポーリーヌの描写には、必ず上記のような精神上の変化がみられる。そこには、家中を笑い声で満たしていた陽気な少女の代わりに、静謐な中に優しさと勇気を兼ね備えた新しい女性が描かれている。ここから推察できることは、激しい嫉妬の衝動を燃やし尽くすたびにポーリーヌは生まれ変わり、より崇高な自我に至っているという事実である<sup>29</sup>。先に挙げた Cabanès は『ボヴァリー夫人』を例に、登場人物とデコールの相互関係を見ながら « la combustion de la passion » という概念を提示している<sup>30</sup>。すなわち、登場人物の衝動はデコールのなかにその呼応するものを見つけ、その情熱は燃焼されるという一つの見方であるが、これはポーリーヌの場合にも同じことがいえるだろう。

これまでラザールとポーリーヌを例に、『生きる喜び』における自然の物質と病の相互関係を見てきた。二人ともそれぞれ遺伝的病に苦しみそれを克服しようとしたが、ラザールはその戦いに敗れたのに対し、ポーリーヌは戦いに勝つだけでなく、より崇高な自我へと至ることに成功している。ここではあえて精神的なレヴェルだけにおけるポーリーヌの自己浄化に焦点をあてたが、ゾラは物語の前半部分でポーリーヌの肉体的レヴェルでの浄化を示唆している。激しい嫉妬心が寓話的に咽頭炎という形をとったものだが、それが膿を吐き出して肉体的に浄化した直後に、主人公は精神的な崇高状態にいたっている。遺伝的に劣悪な条件を強いられているはずのポーリーヌがその病を克服とまではいかぬまでも健康を保っているという事実と、この浄化の概念は無関係ではないように思う。ラザールが、自然を憎み征服しようとして内的な自然をも崩壊させてしまったのに対して、ポーリーヌは自然を愛し、遺伝という避けがたい自然をも当然のこととして受けとめた。そして何よりも大きな違いは、ラザールが富や名声などの皮相的な幸せを追い求めたのに対し、ポーリーヌは自己の内部奥深くに幸福の源泉を求めたという事実である。そこで次は、『生きる喜び』のなかで示唆されるゾラの宗教観について考察する。

### Ⅲ. ゾラの宗教観

第一章ではシャントー夫人とラザールを例に、病をめぐる精神と肉体の問題について分析した。

『生きる喜び』では、過度の出世欲や嫉妬心、欺瞞や憎しみの感情は必然的に「病」というかたちをとる。そのなかでポーリーヌだけが自己を浄化するすべを心得ており、健康を保っている

が、遺伝という病は決して葬り去る事はできないものであり、いつその発作がおこるかわからないとして心弱くなる時もある。それでもくじけることなく、生きていることに、そして変化のない単調な日々が続くことに幸せがあるとして幸福な毎日を送っている。小説最終章では主な登場人物が集まり、初夏のうららかな空の下、ノルマンディーの広大な海を背景にポーリーヌの陽気な姿が描かれるが、それと見事な対照を成して、精神的な死から老人のようになったラザールと、痛風の病状が進み肉体の崩壊したシャントーの姿をわれわれは見る。ここでは荒れ狂う嵐で多くの村人の命を奪ったにもかかわらず穏やかに美しい海の描写に注目したい。

Les yeux sur le vaste horizon, il [M. Chanteau] continua de gémir sans en avoir conscience. Son cri de misère était à présent comme son haleine même. Vêtu d'un gros molleton bleu, dont l'ampleur noyait ses membres pareils à des racines, il abandonnait sur ses genoux ses mains contrefaites, lamentables au grand soleil. Et la mer l'intéressait, cet infini bleu où passaient des voiles blanches, cette route sans bornes, ouverte devant lui qui n'était plus capable de mettre un pied devant l'autre<sup>31</sup>.

この広大な海の描写と、無力なシャントーのコントラストは、大自然と人間の卑小さという関係につながる。われわれ人間が病や死に無力であり有限の存在であるのに対し、海は不滅の無限の存在である。人は死に滅びても、海は永遠にその律動を繰り返す。しかし、人間は宇宙の一部として常に自然から影響を受けて生きているというものの見方をラザールは決して受け入れることができなかった。彼にとって、科学とは自然に対して人間の優位性を示す道具であり、人は意志のちからでその自然を征服せねばならない。科学における物質面以外の進歩は一切信じず、自己という単一の存在に固執し続けるこの青年は、近代社会の病弊を体現していると言えるだろう。そのようなラザールにとって、死とは人間個人の存在に終わりをもたらすものであり、恐怖以外の何ものでもなかった。

Encore si Lazare avait eu la foi en l'autre monde, s'il avait pu croire qu'on retrouvait un jour les siens, derrière le mur noir. Mais cette consolation lui manquait, il était trop convaincu de la fin individuelle de l'être, mourant et se perdant dans l'éternité de la vie. Il y avait là une révolte déguisée de son moi, qui ne voulait pas finir<sup>32</sup>.

上の引用箇所は、母を亡くして悲しみに打ちひしがれたラザールが、慰めを求めて教会の墓地を訪れる場面である。無限の魂を信じられず、死の恐怖にとらわれている青年の愚かさが揶揄されている。肉親の死という現実、ラザールの自我を大きく揺るがし、人間の無力さを、そして果てしない闇への恐怖をさらに募らせるものだった<sup>33</sup>。この死への絶え間ない恐怖は生の倦怠を増し、ラザールの神経症はこの時期を境に悪化の一途をたどることになる。一方、病に苦しむシャントー一家と違い、『生きる喜び』のなかでポーリーヌと同じように心身ともに健康とされる人

物が二人いる。それはカズノーヴ医師とオルトゥール神父であるが、二人ともそれぞれゾラの科学観と死生観を体現していると言える。貧しいボンヌヴィルの教区の司祭を務めるこのオルトゥール司祭は、飲む水と食べるパンさえあればそれで幸せという好人物として描かれており、上の引用部分の直後にラザールは、小さな菜園の荒れた土地を一生懸命耕しているこの神父を見かける。菜園の中<sup>34</sup>で、農夫のように日に焼けて人の良い顔をした司祭と、自然のことなどたわいのない話をしているうちに、ラザールはパリの思想<sup>35</sup>や喪の悲しみから一時的に解放されたような気がする。青年はこのような貧しく純真な人になりたいと考え、思わず独り言のように死の観念を口にしますが、以下はその後の二人のやりとりである。

— Ce n'est pas gai, de vivre parmi ces croix, pensa tout haut le jeune homme.

Le prêtre, surpris, s'était arrêté de bêcher.

— Comment, pas gai ?

— Oui, on a toujours la mort devant les yeux, on doit en rêver la nuit.

Il ôta sa pipe, cracha longuement. Ma fois, je n'y songe jamais... Nous sommes tous dans la main de Dieu.

Et il reprit la bêche, il l'enfonça d'un coup de talon. Sa croyance le gardait de la peur, il n'allait pas au-delà du catéchisme : on mourait et on montait au ciel, rien n'était moins compliqué ni plus rassurant<sup>36</sup>.

上の引用部分には、ラザールとオルトゥールの死生観の違いが明確に表れている。人が死を超えた信仰を抱くには、教理問答以上の何ものも要らない。菜園の野菜のように人は死んだら天国へいだけだとして、生きていること、そして自然への日々の感謝を怠らない司祭の姿には何かしら神々しいものがある。荒れた大地の上にかがみ込む彼の姿は祈りの姿に通じるだろう。「黒い法衣のその下にあらゆる罪を隠した偽善的な神父<sup>37</sup>」と異なり、見事に自然と調和して生きるすべを知っているこの司祭と共通する宗教観を持っているのが、ポーリーヌである。下の引用部分は、彼女が12歳のときに最初の聖体拝領を受けた時分の内面生活の描写である。

Lentement, la religion s'était emparée d'elle, une religion grave, supérieure aux réponses du catéchisme, qu'elle récitait toujours sans les comprendre. Dans sa jeune tête raisonneuse, elle avait fini par concevoir de Dieu l'idée d'un maître très puissant, très savant, qui dirigeait tout, de façon à ce que tout marchât sur la terre selon la justice; et cette conception simplifiée lui suffisait pour s'entendre avec l'abbé Horteur<sup>38</sup>.

この引用からわかるように、ポーリーヌにとってのキリスト教は、教理問答書のなかの抽象的な思想とは全く別のところにあった。教会が教える教義は単なる道徳に過ぎず、直接自分の魂に訴えかけてくるものではなかったのだ。シャントー夫人に代表される中産階級の多くの人間が、

「行儀作法と同じ資格で良い教養の一部となっている儀礼的な宗教<sup>39</sup>」を信仰していたのに対し、ポーリーヌは自己を救い得る崇高な信仰を誰に教わることもなく確立していたといえる。シャントー夫人は世間体のために教会にも通い、表向きはクリスチャンであったが、その偽善的な宗教観では彼女の魂を救うことができなかった。以上のことを考えると、ゾラの考える当時のキリスト教とは、形式的、倫理的な側面だけを重んじて、中産階級の偽善的な倫理意識を満足させるものであり、それ以上のものでは決してなかったことがわかる。一方、ポーリーヌやオルトゥール神父のように、自己の信仰を確立して生の充足を享受する人物像に作家の希望が託されている。この二人は死を生と同じくらい当然の事として受けとめ、その向こうにある広大な世界を無意識裡に認めているが、生の充足はこの認識があって初めて可能になるだろう。死と同じように逃れ得ない遺伝的な病をポーリーヌが自己のものとして認め、そして心身の調和を保っているという事実もこれに通じると言える。

このようにゾラの考えを分析してみると、ラザールに代表される近代人の病は深刻なものであり、その問題はフランスの思想に淵源するように思える。少なくとも、19世紀末のフランス社会に関する限り、観念論的なキリスト教と、自然破壊を正当化した物質文明、そして近代科学への絶対の信仰が近代人の精神的危機をもたらしたことは疑うべくもない。われわれはそこに科学万能主義社会の病弊を見ることが出来る。

#### IV. 科学万能主義 対 人間における自然の回復

それでは近代社会の治癒への道とは、そして近代科学における真の進歩とは一体何であろうかという問題をもとに、『生きる喜び』において示唆されているゾラ思想を探る。これまで登場人物の病をめぐる精神と肉体の関係、そしてその病と自然の関係を分析し、そこから作家の死生観にまで考察を広げたが、次に、ゾラ独自の思想を、当時の科学文明社会との関係においてみていく。文明というイデオロギーは、19世紀の近代科学によってその攻撃的な側面を強め、人間と自然との分断化を進めたが、人間は自然から独立してそれを征服せねばならないという命題は、ほとんど近代人の強迫観念にさえなった。そういうはやりの思想に毒され、科学の絶対を盲信し、その科学が満足を与えぬと、それ自身を否定して厭世思想に救いを求める現代人の病む姿が、ラザールに凝縮されている。

Mais, dominant tout, noyant tout, son ennui devenait immense, un ennui d'homme déséquilibré, que l'idée toujours présente de la mort prochaine dégoûtait de l'action et faisait se traîner inutile, sous le prétexte du néant de la vie. Pourquoi s'agiter ? la science était bornée, on n'empêchait rien et on ne déterminait rien. Il avait l'ennui sceptique de toute sa génération, non plus cet ennui romantique des Werther et des René, pleurant le regret des anciennes croyances, mais l'ennui des nouveaux héros du doute, des jeunes

chimistes qui se fâchent et déclarent le monde impossible, parce qu'ils n'ont pas d'un coup trouvé la vie au fond de leurs cornues<sup>40</sup>.

ラザールが海草から科学的物質をとりだして薬品を製造する事業に失敗したことはさきに述べたが、その失敗はこの青年を科学の前面否定へと駆り立てる。科学における物質面の繁栄ばかりを追い求め、それに挫折すると科学の存在価値を打ち消そうとするラザールの姿勢には、近代科学が大きな発展を遂げた19世紀末のフランス社会における思想的混乱を見ることができる。それはもはやウェルテルやルネが抱いた昔の信仰への郷愁などではなく、科学に対する「絶対」の信仰と驕りゆえに心を病む近代人の憤懣に他ならない。それ故、ラザールの抱くその「懐疑」には、人間性にかかわる深遠なものとは程遠く、物質面の進歩に対する人間の飽くなき要求が表出している。

このような人物を描く一方で、ゾラはある人物に自己の科学観を代弁させている。それは、オルトゥール神父とともに先に名を挙げたカズノーヴ医師だが、この人物にこそ、『生きる喜び』におけるゾラの思想的変遷を読み解くかぎがあるとおもわれる。以下は、その人物像の簡単な紹介である。

Il [Cazenove] affectait un grand scepticisme. Pendant trente ans, il avait vu agoniser tant de misérables, sous tous les climats et dans toutes les pourritures, qu'il était au fond devenu très modeste : il préférait le plus souvent laisser agir la vie<sup>41</sup>.

この医師は科学の絶対を盲信することはない。その「懐疑主義」とは、様々な病や死をその目で見てそして戦ってきた彼自身の経験から生まれたものである。それはラザールの身勝手に浅はかな懐疑とは違い、科学のちからではどうすることもできない未知に対する認識と、敬服、そして人間の生に向ける真摯な姿勢から初めて生まれる「懐疑」なのだ。科学にも限界がある、そして病という大きな障害にぶつかったときに、頼りになるのは人間本来の生命力であろう。カズノーヴの医学観は生命への深い信頼に基づいており、シャントー一家の病と戦う姿勢には彼自身の医学観が明白に表れている。その顕著な例の一つとして、ルイーズの難産の場面におけるカズノーヴとラザールの対照的なやりとりを以下に引用する。

Le jeune homme [Lazare] se fâchait à son tour.

— Alors, la médecine ne sert à rien.

— A rien du tout, lorsque la machine se détraque... La quinine coupe la fièvre, une purge agit sur les intestins, on doit saigner un apoplectique... Et, pour le reste, c'est au petit bonheur. Il faut s'en remettre à la nature<sup>42</sup>.

ここにはカズノーヴの生に対する謙虚な姿勢がある。科学の限界を認めて、そのちからの及ぶこ

とのない未知の部分に立ち入ることはせず、人間本来の持つ生命力にかけると断言できるこの医師ほどに勇気のある人物像は、当時の文学作品にあまり例をみないであろう<sup>43</sup>。科学でも救うことのできない生命の危機に瀕してラザールは科学を無駄だと言い切るが、カズノーヴは、人間の身体が狂えば結局は科学など何の役にも立たないものだと断言している。その姿には、疑いも抱かず近代の科学に絶対的普遍性を追求するあまり、生命の尊厳を忘却してしまった多くの科学者や医者と同極にある彼の思想が表出している。カズノーヴの医学はあくまでも生命に対する深い信頼と愛情に貫かれており、患者の身体を機械か実験道具としてみるようなことはしない。ポーリーヌを危篤状態にした咽頭炎の切開を拒み自然治癒を主張したときにも、この医師の同じような躊躇がみられた。ちなみに、彼はルイズの難産に対しても、自然にそなわったちからにまかせるとしてクロロフォルムの使用を拒否している<sup>44</sup>。

科学の進歩を体現する医療技術の一環としての薬品があるが、「un champ d'expérience<sup>45</sup>」と成り果て、結局は治癒することのなかったシャントーが科学文明のひずみを具現している。そこで問題になるのがポーリーヌだが、彼女がどのようにして遺伝という病に屈することなく健康を保ち得ているかがその大きなかぎになるといえる。それはまず、自然と調和を成して生きるすべを知っているからであり、その遺伝という自己の自然を受けとめることを、そして自然と親しむことによって自己の内部を強化することを知っていたからであろう。しかし、自然と生きるということは、決して野蛮人のように墮落して生きるのではなく、人は分別をもって自己を強化せねばならない。それは、その不衛生と道徳的墮落のせいで常に肉体的精神的病にさらされているボンヌヴィルの村人とポーリーヌとのコントラストに明確に表れている。さらに、ラザールが死を恐れるあまり自然を憎んで人生を台無しにしたのに対し、ポーリーヌは自然を愛し、死を恐れることなくその生を尊んだ。人体は自然のリズムに左右されるものでありその流れに逆うことはできないが、『生きる喜び』では、自然と親しむことによって精神と身体の均衡を保つことができるという興味深い仮定が提示された<sup>46</sup>。ルネッサンス期には、人は4元素<sup>47</sup>に基づく小宇宙に例えられ、ヒポクラテスやガレノスは、人体に備わる「*medicatrix vis naturae*」「自然治癒力」に深い信頼をよせていた。近代科学はゾラの時代に至って目を見張るような進歩、発展を遂げた。そこには多くの長所もあるが、機械論的な考え方を重視するあまり、人間に本来備わっている生命力を見落とすことになった。一方、カズノーヴ医師の医学観にはこれら古代の医師たちと共通する面がみられる。どんなに強い薬を使っても、生命力が落ちていれば何の役にも立たないだろう。このような人間本来の持つ自然治癒力への篤い信頼は、デカルトの機械論がはびこる17世紀以前の宇宙と人間の一体化の思想との類似を示すとともに、科学の世界には多くの限界があり、科学的発見や説明の意味が永遠に普遍ではないというゾラを思想を伝えている。さらに、ゾラは彼の時代の片寄った科学主義を前面否定するのではなく、超えていくことが必要だと考えており、それが極めて示唆的に表明されている箇所を以下に引用する。

[...] Ah ! je reconnais là nos jeunes gens d'aujourd'hui, qui ont mordu aux sciences, et qui en sont malades, parce qu'ils n'ont pu y satisfaire les vieilles idées d'absolue, sucées

avec le lait de leurs nourrices. Vous voudriez trouver dans les sciences, d'un coup et en bloc, toutes les vérités, lorsque nous les déchiffrons à peine, lorsqu'elles ne seront sans doute jamais qu'une éternelle enquête. Alors, vous les niez, vous vous rejetez dans la foi qui ne veut plus de vous, et vous tombez au pessimisme... Oui, c'est la maladie de la fin du siècle, vous êtes des Werther retournés<sup>48</sup>.

科学の進歩が急激な発展をみた19世紀末のフランス社会に生きる知的階級の若者達の思想的混乱、そしてその精神的な病をゾラは多分に皮肉をこめて揶揄している。その病とは、科学にも限界があるという事実を認めることができずに、物質的な進歩ばかりを追い求め、その普遍性を盲信することによって精神内部を崩壊させてしまうことである。ゾラにとって科学とは決して普遍的なものではなく「éternelle enquête」であり、真の進歩とは、その過誤を認めて改めていく姿勢にある<sup>49</sup>。そして、忘れてはならないのが、科学の一環としての医療のあり方であり、カズノーヴ医師が実践しているような人間性に基づいた科学が必要とされるだろう。そこに、物質的な進歩ばかりを追い求めて満足している同時代の楽観的な進歩主義者とは意を異にするゾラの新しい思想がみられる。それこそが、ゾラを単なる進歩主義者としてひとくくりにはしない所以であり、この作家における「進歩」という概念がより深遠で精神的なものであるということがわかる。

## 結論

このようにして、『生きる喜び』におけるゾラ独自の思想を、当時の科学文明との関係において考察した。この作品で提示されたその思想は、現存する社会を超越するように見える。クロード・ベルナルの実験医学を標榜し、『実験小説論』で科学の輝かしい未来を謳ったにもかかわらず、ゾラはこの作品において彼自身の新しい哲学を発見している。登場人物の心理を深く分析し、病が身体を蝕む過程を明確に描くことで、精神であり同時に肉体である人間の存在を提示した。そこには、デカルトの二元主義、もしくは物質主義や精神主義とは異なるゾラ独自の思想がある。厭世主義に関して言えば、最初の草案執筆時には、セアールやユイスマンス、モーパッサン等が浸っていた悲観的な側面に影響を受けていた。しかし、1883年に改めて筆をとったときには、すでに、友人の懐疑と絶望に対して疑問を持っていたと見られる。この点で、『生きる喜び』は、『さかしま』や『女の一生』の作者への強烈なアンチ・テーゼとして位置づけることができるだろう。もしも運命が彼から母親を奪うことがなかったならば、『生きる喜び』はゾラのいう「未消化な」厭世主義だけを反映した、全く別の作品になっていたかもしれない。皮肉にも、実生活における辛い体験が作家自身の思索を深めたといえる。

ゾラはいわゆる哲学的な意味においての思想家ではなく、まして東西の思想や宗教に通暁していたはずもない。しかし、『生きる喜び』には一思想家としてのゾラの深遠な思想が随所にちり

ばめられている。それは抽象的な論理などではなく、科学文明が見落としてきた人間と自然、人間と宇宙の合一に向けたゾラ思想であり、そういう思索がなければ、科学の進歩も人類の未来には貢献することができないであろう。このようなゾラ思想を、キリスト教と西欧科学をめぐる19世紀フランス思潮との関連性において捉えなおしていくことは、意義あることだと思われる。

## 注

- 1) Maarten Van Buuren, *« Les Rougon-Macquart » d'Emile Zola : de la métaphore au mythe*, Paris, José Corti, 1986 ; Claude Seassau, *Emile Zola : le réalisme symbolique*, Paris, José Corti, 1989.
- 2) Jean-Louis Cabanès, *Le Corps et la maladie dans les récits realists*, Klincksieck, 1991. 文学作品における幻覚や衝動の問題はJean Borieも多く取り扱っている : Jean Borie, *Le Tyran timide*, Klincksieck, 1991.
- 3) Henri Mitterandの« Étude »によると、ゾラがポーリーヌを主人公にした苦しみと善意についての小説についての考案をしたのは、『ナナ』を書いた直後の1880年の春だとされる。しかし、同年10月の母親の死が作家に大きな打撃を与え、最初の草稿は頓挫することになる。『生きる喜び』の草案が再び取り上げられるのは、1883年の2月である。同年の11月29日から翌年の2月3日まで*Gil Blas*誌に掲載され、同月の11日から出版される。*La Joie de vivre*, éd. Henri Mitterand, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », t. III[1964], pp. 1745-1754. なお、本論での『生きる喜び』の引用には、このMitterand版を使用している。(以下、*La Joie de vivre*をJVと略し、「Étude」や« Notes »も含めた引用についてはプレイアード版のページ数を記す。)
- 4) JV, p. 1745
- 5) このルーゴン・マッカールの系統樹(1893年)はプレイアードの第五巻に付属しているものだが、第一版(1873年)は、『愛の1ページ』の初版当時に公表されたもので、プレイアード第二巻(『愛の1ページ』所収)に付属している。
- 6) その遺伝理論を構成する一つの要素として「隔世遺伝」があるが、ゾラは実際には« hérédité en retour »という語を用いている。他の3タイプの遺伝はそれぞれ« hérédité en directe », « hérédité indirecte », « hérédité par influence »であるが、これは『パスカル博士』のパスカル博士によって語られる。興味深いことに、博士は「隔世遺伝」の被害者の名を連ねながら、ポーリーヌを完全に健康だとしている。「J'ai dû même spécifier un quatrième cas [quatrième cas dans l'« hérédité en directe »] très remarquable, le mélange équilibre, Pierre et Pauline. [...] Mais où je suis très riche, c'est pour l'hérédité en retour : les trois cas les plus beaux, Marthe, Jeanne et Charles, ressemblant à Tante Dide, la ressemblance sautant ainsi une, deux ou trois générations. L'aventure est sûrement exceptionnelle, car je ne crois guère à l'atavisme. » (*Le Docteur Pascal*, t. V, p. 1007)
- 7) « Pourtant, elle ne se corrigea pas, c'était une poussée intérieure qui lui jetait tout le sang de ses veines au cerveau. Il semblait que ces violences jalouses lui vinssent de loin, de quelque aïeul maternel par-dessus le bel équilibre de sa mère et de son père, dont elle était la vivante image. » (JV, pp. 845-846)
- 8) 修士論文(« Maladie et Guérison dans *La Joie de vivre* », 2001年1月に京都大学大学院文学研究科に提出)では病む家としての擬人化の問題と、そこから家という空間のなかでの、シャントー家の人びとの病をめぐる相互的な影響を試みた。すなわち、家のだれかが精神的な鬱屈をためこむと、それが家という空間を漂い、その空気を無意識に察した別の誰かが病を悪化させるという理論だが、

ここでは割愛する。

- 9) *JV*, pp.952-953.
- 10) ゾラの母親は、1880年の10月17日に心臓発作で死去している：「L'agonie de Mme Chanteau dans *La Joie de vivre*, c'est celle de Mme François Zola. Toutes deux succombent des suites d'une maladie de cœur.» (les mots de Maurice Le Blond, cités par Henri Mitterand, *Correspondance*, la note à la lettre du 18 octobre 1880, p. 382). この注ではゾラの母の足の水腫も語られている。
- 11) 『生きる喜び』では母親や友人の死による作家個人の葛藤だけではなく、ショーペンハウエルの厭世思想に対する感情も示唆されているが、これは後に詳しく考察する。ショーペンハウエルの著作は1880年に初めて『箴言集』« *Les Pensées, Maximes et fragments* »が翻訳され、ユイスマンスやモーパッサンに深い影響を与えた。ゾラもまた、時代の厭世思想に影響を受けた時期もあったが、1883年の『生きる喜び』執筆当時にはすでに、仲間が執着する厭世哲学に対して懐疑的な態度を抱いていたという見方が一般的である。
- 12) ゾラはラザールの厭世主義を、「mal digéré」「未消化な」としている。それはゾラが当時のフランスの厭世主義者全般に抱いていた感情そのものであろう。以下は、あるイタリアの批評家に厭世主義について聞かれたときの答えである。  
«[...] je n'ai voulu en [de Lazare] faire un métaphysicien, un parfait disciple de Schopenhauer, car cette espèce n'existe pas en France.» (*JV*, p.1752).
- 13) ゾラを担当していた精神科医の手記によると、ラザールの奇妙な繰り返し行為や強迫観念などは、そのままゾラのものであるという。以下は Mitterand の « Étude » を参照。「[...] Le docteur Toulouse les [les manies de Zola] a minutieusement enregistrées : « la perpétuelle crainte de ne pouvoir faire sa tâche journalière », « l'arithmomanie ou le besoin de compter », le besoin de « toucher, un certain nombre de fois avant de se coucher, les mêmes meubles », la « superstition des chiffres », la manie de « toucher les becs de gaz rencontrés dans la rue; de sortir de chez lui du pied gauche ». (*JV*, p.1744.)
- 14) *JV*, pp.1055-1056.
- 15) 実際、多くの研究者が、海の嵐、シャントーの痛風、ポーリーヌの月経、そしてラザールの神経症の周期について述べている。Michel Serres も、海の律動とシャントー家の身体のリズムを比較しており、以下はラザールを例に挙げたコメントである。「Le long de la séquence aux métamorphoses de Lazare, compositeur, médecin, romancier, ingénieur de génie civil, et ainsi de suite, chaque état se soldant par une catastrophe ou un avortement, et, [...] et débâcle de ce mélancolique maniaco-dépressif, qui, lui aussi, épouse la marée, ses rythmes et ses ruines, hautes et basses mers de syzygie et solstice, mais pour qui le flot, le jusant, ne sont que marées noires comme l'encre, l'encre des écrits et des pleurs de Schopenhauer, la bile et l'atrabile de l'instinct de mort et réactif, le long de la suite alternée, décadente, amortie, le long de la circulation périodiquement ralentie, ou s'arrête un instant à l'industrie chimique.», Michel Serre, *Feux et signaux de brume Zola*, Grasset et Fasquelle, 1975, p.259.
- 16) *JV*, p.903.
- 17) « La mer (comme femme, comme l'absurdité de la vie) s'impose comme une proie formidable, dangereuse, et attirante [...] » Joan Grenier, « La structure de la mer dans *La Joie de vivre* », *Les Cahiers Naturalistes*, n°58, p.68.
- 18) Bachelard は『水と夢』第8章の « L'Eau violente » で、Balzac の *L'Enfant maudit* に依拠しながら荒れ狂う海の嵐と魂の猛りの間に照応関係があるとしている。「Entre Etienne et l'Océan, il n'a pas seulement une sympathie molle. Il y a surtout une sympathie coléreuse, une communication directe et réversible des violences. Il semble alors que les signes objectifs de la tempête ne soient plus nécessaires pour que l'Enfant maudit prédise la tempête. Cette prédiction n'est pas d'ordre sémiologique; elle est

- d'ordre psychologique; Elle relève de la psychologie de la colère. », Gaston Bachelard, *L'Eau et Les Rêves : essai sur l'imagination de la matière*, Paris, José Corti, 1976 (1re éd. 1942), p. 234. さらに, Jean Borie も, ラザールが欲望を抑制しようとする行為と, 荒れる波をせき止めようとする行為の象徴的な類似を述べている。「Lazare, au contraire, tente d'endiguer la colère des vagues comme il essaie de refouler ses désirs. », Jean Borie, *op. cit.*, p.76.
- 19) *JV*, pp.999-1000.
  - 20) ラザールの症状は現代の精神医学では躁鬱病といえるし, さらに奇妙な繰り返し行為や数字に対する強迫観念 (*JV*, p.999, p.927, pp.1053-1054) は現代でいう強迫神経症の症状にあてはまる。もちろん当時の医学言説にはないが, 登場人物の背後に作家の症例を見ることは興味深い。
  - 21) *JV*, p.1020.
  - 22) *JV*, pp.1042-1043.
  - 23) 小説の進行順に引用ページ数のみ列挙する。(*JV*, p.1030, pp.1042-1043, pp.1060-1061)
  - 24) ここでは « métaphores obsédantes » という概念を適用できる。Charles Mauron, *Des Métaphores obsédantes au mythe personnel*, José Corti, 1964. « Nous nous préoccupons ici de processus inconscient. Toutes les répétitions thématiques que l'on peut constater dans une œuvre ne sont pas inconscientes; mais nous avons choisi d'étudier celles qui ont chance d'être. » (*JV*, p.211) 『生きる喜び』のろうそくの炎が果たす機能も, 作家が意識的にというよりは無意識において付与したものとみることができ。
  - 25) Bachelard は実際に 『ろうそくの炎』と題してその機能について述べている。「Pour un rêveur de flamme, la lampe est une campagne associée à ses états d'âme. Si elle tremble, c'est qu'elle pressent une inquiétude qui va troubler toute la chambre. Et au moment où la flamme clignote, voici que le sang clignote au cœur du rêveur. », *La Flamme d'une chandelle*, Presses Universitaire de France, 1961, p.44.
  - 26) *JV*, p.1044.
  - 27) J.-L. Cabanès, *op. cit.*, p.329.
  - 28) *JV*, p.1047.
  - 29) 書面の都合上, 本文では一例に限ったが, 以下により適切な例を抜粋する。ラザールとルイーズの結婚前, ポーリーヌが激しい嫉妬の衝動に苦しんだ翌日の描写である (注22で提示した「ろうそくの炎の機能」の1030ページの例に続く「浄化」)。  
« Jamais elle ne s'était sentie si légère, si haute, si détachée. [...] L'orgueil de son abnégation s'en était allé, elle acceptait que les siens fussent heureux en dehors d'elle: C'était le degré suprême dans l'amour des autres. » (*JV*, p.1031)
  - 30) « La recherche d'une cohérence stylistique impose dans *Madame Bovary* une application serrée entre les motifs obligés de la passion (feu, froid, frisson) de la diégèse. Ce qui se joue dans un corps, trouve métonymiquement son répondant dans le décor, mais ce qui est constitutif d'un décor (humidité, flamme, chaleur) a une valeur fonctionnelle et annonce le développement de l'action romanesque. Enfin, les pulsions des personnages renvoient à une énergétique, à la "combustion" de la passion. » (J.-L. Cabanès, *op. cit.*, p.329)
  - 31) *JV*, p.1108.
  - 32) *JV*, p.990.
  - 33) ゾラは死の恐怖をラザールに与えているにもかかわらず, 『さかしま』についてユイスマンスに宛てた手紙で以下のように言っている: « [...] Autre remarque: pourquoi Des Esseintes prend-il peur devant la maladie? Il n'est donc pas un schopenhauerien, pour redouter la mort? Le mieux pour lui serait de se laisser emporter par sa maladie d'estomac, puisque le monde ne lui paraît pas habitable.

Votre dénouement, sa résignation à la bêtise de vivre, me le gâte un peu.» (la lettre de Zola à Huysmans, datée du 20 mai 1884, et citée par Pierre Waldner: voir «Archives de l'œuvre» d'A Rebours, GF-Flammarion, p. 244) ここにも、同時代の厭世主義者に対する痛烈な皮肉が込められている。ゾラはラザールの厭世主義を「未消化な」とすることによって、死の恐怖を超越した深遠な厭世主義者ではなく単に心を病んでいる同時代人を弾劾している。この青年の神経症の顕著な兆候のひとつに死への異常な恐怖という強迫観念があるが、以下にその一部を抜粋する: «Aussi les angoisses de Lazare avaient-elles grandi. Depuis des années, à son coucher, l'idée de la mort lui passait sur la face et glaçait la chair. Maintenant, il n'osait s'endormir, travaillé de la crainte de ne plus s'éveiller.» (JV, p.998).

- 34) この菜園と精神的な開放感との関連性を示す例は、『パリの胃袋』のフランソワ夫人の菜園にも見られる。善良だが神経質なフローロンはパリの人間と生活に心身の疲労を感じるが、菜園の空気の清浄さと、夫人の気取りのない話に、深い安らぎを覚える。「L'après-midi, Mme François et Florent se trouvèrent seuls au bout du potager, dans un coin du terrain planté de quelques arbres fruitiers. Ils s'étaient assis par terre, ils causaient raisonnablement. Elle le conseillait avec une grande amitié, à la fois maternelle et tendre.» (*Le Ventre de Paris*, t. I, p.803) しかしその感覚は菜園をでたとたん失われることになる。「Pendant un quart d'heure★Florent marcha sans parler, assombri déjà, se disant qu'il laissait sa santé derrière lui.» (*Ibid.*, p.804)
- 35) ここではパリの知的階級で広まった厭世思想のこと。
- 36) JV, p.991.
- 37) «ces hypocrites dont les robes noires cachaient tous les crimes» (JV, p.850)
- 38) JV, p.849.
- 39) «une religion de convenance, qui faisait partie de bonne éducation, au même titre que le maintien.» (JV, p.847)
- 40) JV, p.1057.
- 41) JV, p.836.
- 42) JV, p.919.
- 43) 『ボヴァリー夫人』のなかで科学の進歩をふりまわしてメ・ボットに無理な手術を受けることを強要し、不自由な身体にしてしまったオマーなどは、カズノーヴとは好対照を成している。
- 44) これは当時台頭しつつあったネオ・ヒポクラテス派等の主張にもあるが、資料不足と論旨から外れる故、これに関しては述べない。
- 45) JV, p.834.
- 46) オルトゥール神父の菜園と健康との関連性はすでに述べたが、海の役割にも注目したい。ポーリーヌとラザールの海水浴のシーンでは、ラザールでさえも健康な青年に戻る。ここでは割愛するが、ポーリーヌが波に揺られて呼吸のリズムを整える箇所があり、こういう自然と健康の間の密接な関係は無視できない。
- 47) 土、水、空気、火という4元素は、アリストテレスの自然学の基礎として有用であっただけでなく、それに関連した4体液（血液、黄胆汁、黒胆汁）というかたちで、ガレノスの医学理論の基礎としても役立つことになる。さらに、この4元素の概念は、小宇宙と大宇宙のアナロジーにもつながっている。「En effet, les éléments opèrent dans le monde de la même façon que les quatre humeurs opèrent dans ce monde en réduction qu'est homme, ce microcosme dont j'ai parlé plus haut» (Guillaume de Saint-Thierry, *De Natura corporis et animae*, texte et traduction, M. Lemoine, *De La Nature du corps et de l'âme*, Paris, société d'édition «Belles Lettres». 1988, p.80.)
- 48) JV, p.993.
- 49) このカズノーヴ医師の未知へ対するあくなき探求は、パスカル博士の信念に通じている。

« Toujours, elle [Clotilde] devait rester un peu l'enfant croyante d'autrefois, curieuse du mystère, ayant le besoin instinctif de l'inconnu. Elle avait fait la part de ce besoin, elle l'expliquait même scientifiquement. Si loin que la science recule les bornes des connaissances humaines, il est un point sans doute qu'elle ne franchira pas; et c'était là, précisément, que Pascal plaçait l'unique intérêt de vivre, dans le désir qu'on avait de savoir sans cesse davantage. Elle, dès lors, admettait les forces ignorées où le monde baigne, un immense domaine obscur, dix fois plus large que le domaine conquis déjà, un infini inexploré à travers lequel l'humanité future monterait sans fin. » (*Le Docteur Pascal*, t. V, pp.1211-1212)